

ご挨拶



第35回日本脊髄外科学会
会長 谷口 真
(東京都立神経病院 脳神経外科)

第35回年次総会の会長を拝命した東京都立神経病院の谷口 真です。私の現在所属する施設としては、高橋 宏会長の1999年、第14回以来21年ぶりの開催となります。

二十年、ふた昔という期間は、昨今の様に移り変わりの激しい時代には、それまでの常識を書き換えるのに十分な程の長い時間です。実際、われわれの学会もこの間に大きな変貌を遂げました。前回の頃には、まだただの未来予想図に過ぎなかった脊椎の術中ナビゲーションは、現在ではインスツルメンテーション手術であたりまえの支援手段として行き渡り、また光学装置の飛躍的な進歩によって、4Kはおろか8K画像など、もはや人の目の解像力と遜色のない性能を持つカメラやディスプレイが実現しつつあり、これによってこれまでは顕微鏡一辺倒だった手術視野獲得の手段に内視鏡や外視鏡など多彩な視点を取れる先進の装置が続々と登場しており、すでに治療戦略自体を変えるインパクトを持ち始めています。技術革新の面だけを見ればまさに今われわれの身近に未来世界が来つつあると言えるかもしれません。しかしその一方で、一世紀も前から抱えてきた根本的な問題の一部は、相変わらず未解決のまま残っており、このため現在でもわれわれ脊椎・脊髄外科医は、手術の最中、科学的事実と言うより宗教に近い信念や自らの限られた経験だけを根拠に重要な意志決定を強いられている、いくつかの側面では時代は思ったほど変わっていないというのもこれまた事実です。

この思いから今回は、学会のメインテーマを Time to Define Neurospine とさせていただきます。数年前にわれわれの学会は、英語名を Neurospinal Society と変更しましたが、Neurospineという言葉の定義には、いまなお曖昧模糊とした部分があります。この言葉を、われわれの学会が脊椎よりはおもに脊髄病変を扱う学会だからと理解する人も居れば、「脳神経外科医」が主体をなす学会だからだとする人もおります。私は、この言葉を脳神経外科医ならではの発想で脊椎・脊髄にまつわる諸問題の解決に取り組む学術活動全般を象徴するもの、いわばニューロサイエンスの一部として脊椎・脊髄外科をとらえる姿勢の表れと考えております。脊椎・脊髄の疾患の治療に関連する領域には、神経組織を扱うものには、まだまだ「学問する」に足る多くの未知・未解決の問題が残っていると思います。

この考えに沿っていくつかのシンポジウムやセミナーを組ませていただきました。まず従来からの学術委員会主催企画を発展させて、教育セッションの意味合いを強めました。今回は、ポスターの絵柄が示す通り脊椎動物が進化とともに抱えるようになった「重力」の問題を取り上げこれに関連する種々の分野の専門家による講演を企画しました。脊椎もまた運動器のひとつであり、その動きは神経の間断ない管理・調節下にあります。その病的状態を扱うには、単純に構造の異常のみでなく、その制御機構を常に視野に入れて考える必要があります。動物界広しといえども直立二足歩行を常時おこなう生物はヒトだけ。重い頭蓋を頂点にのせて高く掲げ、長い胴体を直立させて二足でバランスを維持しながら立ち・歩くという、この不安定きわまりない構造の維持には大変複雑な制御機構が必要です。また、この特殊性のためにヒトの脊柱にはとりわけ重力負荷が強くなり、より多く加齢性変形・変性の問題を抱える宿命があります。また、パーキンソン病や脳性麻痺をはじめとした姿勢異常をきたす疾患では、過剰な筋緊張や不自然な重心の位置によりその変形・変性がさらに加速しますが、これに対して単に構造を矯正しただけではこの問題を根本的に解決することは出来ないこともすでにわかっています。このような病的状態の根本的な解決には、姿勢制御・歩行機構の生理そのものがわかっている事が重要ですが、これが今なお十分に解明されているとは言えません。残念ながらこの課題は動物実験で試す事が出来ず、従ってヒトの治療経験からの情報が重要になります。つまり、われわれ臨床家自身が日々の治療経験を踏まえて同時に神経学者となって自分達で解決を模索していかなければならない問題です。特に脳神経外科医には、神経組織を扱う医療者としてこの問題の解決に率先してあたる使命があります。この意味で、われわれの日々の臨床活動そのものがニューロサイエンス最前線であるという自負を持ちたいというのが私の切なる想いです。

これ以外にもいくつかのシンポジウムを設定しました。先にも述べたように画像機器の技術革新は昨今著しいものです。かつて顕微鏡手術の導入は我々脳神経外科の術野に明るく大きな視野をもたらし、手術の革新を実現しましたが、そのインパクトが余りに大きかったがために、我々脳神経外科医はこれまで、内視鏡その他の新しい手術支援手段についてややもすると無頓着であった傾向が否めません。脳神経外科の治療技術の進歩と技術革新はいつも表裏一体でした。そこで、今回は、これらの新しい光学支援機器の現状と進歩の見通し、またそれらの導入が今後の手術戦略そのものにどのような影響をもたらすかについて議論してみたいと思います。

また、学問とは全く別の問題、われわれ自身の将来も今回のテーマに取り上げます。世界的に見てもやや特異な発展を遂げてきた本邦の脳神経外科は、結果として脳に手厚く脊髄や末梢神経に薄い傾向があることは否めません。このため、脊椎・脊髄領域の疾患を扱う脳外科医は、整形外科に比べて圧倒的に少なく、また世代もやや若いため、ようやくその先頭集団がキャリアライフを終えつつあるというのが現状だと思います。今後、われわれの後に続いてこの領域に参入する後輩達を増やすには、脊椎・脊髄外科医の人生の選択肢と今後の展望をある程度具体的に示してあげる必要があるように思います。ちょうど我々の仲間うちからも大学や大規模病院勤務に定年まで勤める人生以外に、手術は続けながらもクリニックを個人開業する、副業

として手術に携わりながらも本業は研究等々いろいろな生活スタイルを選択する先生方が出てきております。これら先輩達の生き様が、これから脊椎・脊髄外科を目指そうとする若い先生方の参考になればと期待しています。

さらには、脊椎脊髄疾患には、血管障害や腫瘍など脳神経外科医が得意とする硬膜内病変があります。この分野については、稀少疾患ゆえに、限られた個人の経験だけでは治療法を一般化することは難しく、ややもすれば個人の趣味の発表的になりがちでした。今回は、頭蓋頸椎移行部AVFをテーマに、学術委員会公認の多施設共同研究を企画しました。現時点で、参加登録施設は28で100症例を超える見込みです。本企画が今後の大規模研究の先駆けとなることを望んでいます。

また、今回は、日本がアジアスパインの主催国ですので、各国に共通の話題である頸椎人工椎間板を合同シンポジウムで取り上げます。本邦はこの分野の導入で出遅れた感がなきにしもあらずでしたが、ようやく少しずつ使用経験が蓄積されつつあります。また、後発組である事にはデメリット以外にメリットもあります。先行した各国から「本当のところどうなの？」と聞いて前者の轍を踏まない様情報交換できるのも近隣国同士、友人の多い国同士の国際学会の利点だと思います。

一般演題に関しては、今回はアジアスパインを独立した学会ととらえず会期を事実上3日にすることで口演枠を増やし、メイン会場を含めてなんとか2会場で消化出来る様にプログラムを計画しています。いたずらに会場数を増やしては参加していただく学会員の皆様の精魂込めた演題が、閑散とした会場でさしたる議論もされずに演じられることになりかねず学会の本来のあり方から考えても良いこととは思えません。しかしそのために発表時間や学会の開始終了時間等で皆様にご迷惑をかける事になるかも知れませんが御理解いただければ幸いです。

2020年、東京はオリンピックを迎え新しい門出を迎えます。東京が1世紀前に夢見て果たせず、ほぼ50年前にその夢を実現し、それからさらに半世紀を経て新たな時代の始まりのさきがけとして開催するこのオリンピックの年に本会を主催させて頂く事を身に余る光栄と考えております。残念ながら東京オリンピックの2ヶ月前に私の本拠地である東京に会場を確保することは困難でしたので横浜での開催としました。会場は脳神経外科 kongress で皆様御存じのパシフィコ横浜ですが、いつもの建物ではなく、500メートル弱離れた新館での開催となります。2020年の5月によりやくオープンですので、まだ未整備な部分も多く、宿の手配等では会員の皆様方に多々ご迷惑をおかけするやもしれませんが、新しい試みと御理解頂き御容赦頂ければ幸いです。すでに皆様よく御存じの広々とした眺望、早朝の海風の中の散歩などをまた新たな視点から楽しんで頂けると思います。

願わくば当日雨が降りませんようにと今から祈っております。

6月、皆様のお越しをお待ち申し上げます。

令和2年1月吉日

第35回日本脊髄外科学会/第11回Asia Spine開催方法について

ながらくお待たせしました。いよいよ第35回日本脊髄外科学会/Asiaspine2020は、未だかつて本学会自身が経験したことのない多くの予想外の出来事を乗り越えてなんとか開催できそうなところまで到達しました。

そもそもは、横浜に皆様をお招きし、湾内クルーズ船を仕立てて会員懇親会を行うという今から考えると空恐ろしいプランを計画しておりましたが、まさにその横浜、クルーズ船でのコロナクラスター発生から全てが崩れ、予定した学会計画も大きな変更を強いられました。

とりあえず6月予定を11月まで延期し、ここまできれば大丈夫かなと思っていたのに、それでは考えが浅はかすぎ、事態はそれをはるかに上回る展開をし、今なお収束の予測は立っていないのが現状です。

多くの学会・研究会がwith CORONAの中での学会のあり方を模索している最中ですが、これがベストと言うスタイルはまだ生まれておりません。

やはり学会の本質はディスカッションにあり、それも対面で行えばより情報量が多い、なんとかしてそれに近いスタイルを実現したかったのですが、全てのセッションにおいてそれを行うには膨大な資金が必要になる。やむなく折衷案としてシンポジウム・教育講演はライブ配信による一方通信、質問はチャット方式で座長に集めて代表質問、肉声での回答としました。

一般演題とポスターはスタイルを統一してオンデマンド方式プレゼン再生(声入り)とし、学会期間中(変更あり得ます)いつでも好きな時にクリックで再生して視聴、質問はライブ配信同様、チャット方式で集めて演者に送付・学会終了までに演者より直接回答のスタイルとしました。

ご参加の皆様には、在宅よりウェブ視聴のお願いいたします。詳細はHP上に別途掲載します。

現状に一番マッチした学会開催スタイルに向けては今後も各学会が模索を繰り返しつつ工夫が続くでしょうが、とりあえず今回はこのスタイルで開催いたします。多々ご不便お手数をおかけすることになると思いますが状況に鑑みてご協力いただければ幸いです。

2020年10月1日

Greeting from the President



Makoto Taniguchi, MD, PhD

President

The 35th Annual Meeting of the Neurospinal Society of Japan

The 11th Asia Spine Annual Meeting

Director

Department of Neurosurgery, Tokyo Metropolitan Nuerological Hospital

Invitation from Conference President

January, 2020

Dear Colleagues,

It is my great honor and pleasure to hold the 11th meeting of Asiaspine in Japan in the year of Tokyo Olympic Games. The meeting will be held at Yokohama, well-known city close to Tokyo, which is only 30 minutes ride with commuter's train from Haneda International Airport. Meeting this year will be combined with the 35th annual meeting of Neurospinal Society of Japan (NSJ). Although the Asiaspine meeting part will start in the afternoon of 19. June with the joint symposium "Cervical artificial disc". I also welcome all Asiaspine members to our domestic meeting part for free to discuss with us.

Aside from a symposium in Asiaspine meeting organized by the editors of "Neurospine" journal about "Endoscopic Spine Surgery, those symposiums planned for the NSJ meeting may also be stimulating also for the Asiaspine members such as 'Gravity and Bipedalism, what humans gained and lost?', 'New Optical Devices which may aid Spine Surgery', 'Life Planning of Spine Surgeons', and 'Treatment of Hyper-vascular Spinal Disease'. Although official language of these domestic part is Japanese, we ask all Japanese presenters to prepare their key slides in English for the participants abroad. Asides, some of our young colleagues are ready to help you for enhance bidirectional communication upon your request.

A common theme of the both meetings are set as 'Time to Define Neurospine'. I hope these meeting will be a good opportunity to consider the meaning of spine surgery by the hands of neurosurgeons.

Now travel among Asian countries are widely restricted to prevent further spread of new unknown virus. However, I hope this problem will be settled by this coming meeting. And I and the local organizing committee are looking forward to seeing you in Yokohama.

October 1, 2020

Dear Colleagues,

It was only a couple of years ago, when I was nominated to organize ASIASPINE 2020 in Japan. However, the COVID problem changed the whole world drastically in the last 10 months. Our ASIASPINE meeting was not the exception. Further worse, this problem is still continuing to be active, and nobody knows how long it will last.

Under this tough condition, I have been confronted to one decision-making, whether it is worth to hold this year's meeting. The essentials of international meeting are getting together at one place and sharing knowledges and skills to our common problems in a face to face condition. And the question is whether we can simulate this condition on the virtual space.

After experiencing several preceding scientific meetings, I decided finally to have this year's meeting as a TOTAL web conference style. This is the first trial in our meeting, and I am still not sure whether this style fits our traditional ASIASPINE meeting.

The detail will be described on the website, but simply you can stay at home/office and join the meeting by accessing to our virtual meeting site.

Although not ideal, I am trying to keep ASIASPINE meeting even under this difficult condition and transfer its tradition to the next coming conference.

I invite all of you to attend and hope to see you at this virtual meeting on November 10-11, 2020.